

第13回あらかわ俳壇

投句数	312句
投句者数	69名
兼題	蝌蚪、薄暑、螢、当季雑詠
期間	平成31年4月1日(月曜)から令和6月30日(日曜)

特選	あらがひて闇の歪みへ落ち螢	高安 政江さん
選評	美しい詩情を誘う螢は、初夏の風物詩である。夜空へ幻想的な光芒を曳いて飛び交う光景は、光と闇の争いでもあろう。何と言っても圧巻は「闇の歪み」。その中へ落ちては消え行く螢。見事な風趣に富んだ一句である。(佐々木忠利氏)	
入選	御朱印帳墨痕匂ふ薄暑かな	大越 源一さん
	薫風を入れて都電の揺れごち	松本 光章さん
	蟻塚の復旧早し雨上がり	須賀 葉子さん
	糸蜻蛉影の消えたる高さかな	木幡 忠文さん
	螢火ややがて一つの星となり	鈴木 しおりさん

第14回あらかわ俳壇

投句数	394句
投句者数	103名
兼題	サングラス、流星、蓑虫、当季雑詠
期間	令和元年7月1日(月曜)から9月30日(月曜)

特選	稲妻や午前零時の古い靴	竹野 美恵子さん
選評	靴はその人が生きている時間とともにある。「古い靴」ということに人生の長さが集約されている。愛用の靴はなかなか捨てられない。日付の変わる午前零時、闇に稲妻が光り、思い出の中に古い靴が歩きだしそうである。(対馬康子氏)	
入選	浴衣がけ異国娘の人力車	飯沼 節子さん
	花野行く同じ淋しさ持つひと	鈴木 真理子さん
	流星や兜太の句碑の白きこと	渡辺 長二さん
	愛愛愛！！届けあなたに流星よ	金子 大輝さん
	サングラス外すといふもある合図	戸矢 一斗さん

第15回あらかわ俳壇

投句数	419句
投句者数	102名
兼題	木の実、山茶花、年の暮、当季雑詠
期間	令和元年10月1日(火曜)から12月31日(火曜)

特選	云ふなれば自由は孤独野分吹く	鈴木 真理子さん
選評	例えて言うならば自由とは気楽のようだが、孤独と責任が伴うもの。自分の人生において全責任をとる事を常に自覚しなければならない。野の草を吹き分けて通る秋の強い風や台風の様なものを受け入れる覚悟の一端と思える深みの中にも印象深い一句。(佐々木忠利氏)	
入選	年の暮足場解かれてビル生る	北谷 ふみ子さん
	生業の立たぬ商い年の暮	小池 恵美子さん
	包丁の先に南瓜の音跳ねる	木下 君穂さん
	結局は捨てる木の実を拾ひけり	渡辺 典子さん
	陣取りのチョークの丸や木の実落つ	田中 礼子さん

第16回あらかわ俳壇

投句数	296句
投句者数	64名
兼題	毛布、雪解、木の芽、当季雑詠
期間	令和2年1月1日(水曜)から3月31日(火曜)

特選	鉛筆の芯に雪解の匂ひかな	下元 祥三さん
選評	「雪解(ゆきげ)」は春になって積雪が解ける北国の情景であるが、作者は手にした鉛筆にふとその匂いを感じた。鉛筆の黒い芯の匂いと雪が解ける春の水の匂い。なつかしさと悔恨が入り混じったような思いがある。(対馬康子氏)	
入選	初蝶のいつしか水の光かな	渡辺 長二さん
	くすぐると喜ぶこども雪解風	石井 浩美さん
	梅園の近道を抜け母の家	成田 乃里子さん
	空白の多きノートや冬の朝	海野 千絵さん
	子の描くもじやもじやの空木の芽吹く	竹野 美恵子さん

あらかわ俳壇 小中学生スペシャル

投句数	20句
投句者数	13名
兼題	桜、蝶、しゃぼん玉、当季雑詠
期間	令和2年3月13日(金曜)から4月6日(月曜)

特選	満開の桜を見たり一輪車	第二峡田小学校・3年	中澤 結香さん
選評	一輪車を操りながら、両腕を開いて満開の桜を受け止めている。その映像が目に浮かぶ。「満開の桜の下の一輪車」と言わずに「見たり」と強調したところに青春性を感じさせる。表現の省略が効いた素晴らしい作品。(対馬康子氏)		
入選	サングラスにあっけいす出かける日	瑞光小学校・3年	三神 橙子さん
	ダンスするさくら花びら風達と	瑞光小学校・5年	光山 あいかさん
	雪解をじっくり見てるとあきてくる	瑞光小学校・6年	カズテヌさん
	ビュンビュンと風ふけ風ふけ桜舞う	第二峡田小学校・3年	中澤 結香さん
	蝶びたり頭に止まれティアラかな	第二峡田小学校・3年	中澤 結香さん